第四十九回中央教化研究会議　基調講演

法華経を現代に読む

―インド学・仏教学の視点から―

鈴木隆泰

皆様、こんにちは。ご紹介いただきました、鈴木隆泰でございます。「法華経を現代に読む――インド学・仏教学の視点から――」という題で、一時間ほどお話をさせていただきますので、よろしくお付き合いのほど、お願い申し上げます。お手元に資料はございますでしょうか。それに従って進めてまいります。

まず、大前提となることです。結構、仏教に親しまれている方でも、このことを知らなかったり、誤解していたりということがあります。キリスト教における聖書というものと、仏教における仏典・お経とは、決定的に違います。

1－1．キリスト教における聖書と神（主）という存在との関係は、『新約聖書』の最初の部分、「福音書」という部分で説明されています。ヨハネという人が記したとされる「ヨハネによる福音書」の冒頭の部分です。「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった」。ここには、「神（主）が語ったことば、それのみが神のことばであって聖書である」と。つまり、後代の人間が新たに聖書を作り上げるなどということは、絶対に許されないのです。

一方、1－2．仏教における経典とブッダ釈尊との関係は、それとは全く別です。最初の例は、初期仏典の『ヴィナヤ（律蔵）』の中で、お釈迦さまが、養い親の摩訶波闍波提が出家して比丘尼になった後に説いている箇所です。

「摩訶波闍波提よ、もしそなたが何らかの教えを知ったとして、その教えが貪欲ではなく離欲へと導き、繋縛ではなく束縛からの離脱へと導き、〔悪行の〕増殖ではなく損減へと導き、大欲ではなく少欲へと導き、不満足ではなく知足へと導き、群聚との交わりではなく閑寂へと導き、懈怠ではなく精進努力へと導き、維持しがたい状態ではなく維持しやすい状態へと導くのであれば、摩訶波闍波提よ、それは〔誰が説こうとも〕間違いなく法（経典）であり、律であり、師匠〔である私〕の教えであると知らねばならない」。

そして、次が、『アングッタラ・ニカーヤ（増支部経典）』の有名な一節です。「何であれ善く説かれたものであれば、それは〔誰が説こうとも〕ブッダ釈尊のことばである」。仏教は、相手に応じて教えを説く対機説法を基調とします。その対機説法を施す能力のことを方便、そして、巧みな方便のことを善巧方便と申します。導かれる相手があって、相手に応じて教えができるのです。神があって、先に教えがあって、「おまえたち、この教えに合わせろ、この教えに従え」という宗教ではないのです。仏教では人間が先にいて、人間に合わせて教えができてくるのです。

教えを説くブッダとそれを聞くわれわれの関係は、相互作用です。英語で言うとインタラクティブなのです。仏教とはそのような宗教です。一方通行ではないのです。神の命令が降ってくるのではなくて、われわれの在り方が仏さまの説き方を規定してくるのです。

もちろん、ブッダ釈尊が語ったことばは、ブッダ釈尊のことばで経典になります。しかし、何であれ善く説かれたもの、衆生を覚り・涅槃へと導くものは、ブッダ釈尊のことばである、と。仏教においては、衆生を無上菩提へと引導する教えであれば、それは誰が説こうとも、全て釈尊の直説（仏説、仏語）として認められるのです。

だから、「八万四千の法門」と言われるぐらいに膨大な数の経典ができたのです。『法華経』も含め、大乗経典も全てが仏説です。「大乗仏教非仏説論」などというものは、仏教におけるブッダ釈尊のことばとは何なのか、これを知らない無知や誤解から生じたものに過ぎません。いかに紀元後に『法華経』が成立していようが、間違いなく仏説な

のです。

2．釈尊滅後の仏教です。2－1．二つの成仏理論。実は、仏教では成仏に至る理論、理屈が二つあります。元々あったものが、業報作仏と考えられています。自分で修行を成し遂げて、その修行の果報によって成仏に至るという理屈です。

ところが、ある時期から、そこに大事な一つの要素が加わりました。それが、仏さまからもらう予言です。これを「授記」と申します。授記作仏です。もちろん、自分が修行しなければ、だめです。でも、どんなに修行をしても、この授記が得られなければ成仏できない。この授記作仏が、成仏理論の主流になります。その始まりは、原始仏典『ジャータカ』の最初に出てくる「燃燈仏授記」の物語です。

2－2．小乗仏教の誕生です。この授記作仏の思想の淵源は、成仏し涅槃に到達した釈尊です。釈尊は、はるかな過去世に燃燈仏（ディーパンカラ）によって、「おまえは将来ブッダに成るよ」と、授記を得ています。

ところが、仏弟子たちは授記を受けていない。このことによりまず、成仏し涅槃に到達した釈尊と、他の仏弟子たちとの違いが強調されることになりました。彼らは弟子としてブッダの声は聞いた「声聞」です。ところが授記を得ていないため、成仏できない仏弟子（声聞）たちが、成仏していない阿羅漢という状態――供養や尊敬を受けるに相応しい聖者の状態――にとどまることが正当化されたのです。「俺たちが成仏できないのは、俺たちのせいじゃない。授記をもらえないからなんだ」と。「だから、阿羅漢でいいんだ。俺たちは阿羅漢どまりなんだ。阿羅漢こそが最高の境地なんだ」。このような、成仏を目指さない、目指せない仏教を「小乗」と言います。

「小乗ということばは、蔑称であるから使うべきではない」と言われることもありますが、これはやはり使うべきだと私は考えます。成仏に至らない、至れないものは、劣った乗り物だからです。小さい乗り物だからではありません。成仏まで至れないという点で、劣っているからです。小乗の原語「ヒーナヤーナ」の「ヒーナ」に、「小さい」

という意味はありません。「劣っている」という意味です。ということは、その対の概念である大乗も、「大きな乗り物」ではなく、「立派な乗り物」という意味になります。「きちんと彼岸、向こう岸まで着ける立派な乗り物」という意味なのです。

2－3．釈尊入滅後は果たして無仏の時代だったでありましょうか。実は、そうではありませんでした。釈尊は入滅しても、その現存は、二つの在り方（実際は三つ）で確認されています。一つはダルマカーヤ、法身としてです。もう一つはルーパカーヤ、色身としてです。ダルマカーヤとルーパカーヤの二身説というのは、大乗仏教が生み出したものではありません。仏教に元々あるものです。

まず一、ダルマカーヤの方は、さらに二種類に分かれます。なぜかというと、仏教ではダルマ（法）が大きく、二つに分かれるからです。仏教においてダルマは、①まずは真理。目に見えない、ことばでは説けない、自らが体得するしかない真理。仏菩提、般涅槃、諸法の実相というダルマ、真理と、②今度は、教え（経典）としてのダルマ。二身説ですが、最初、法身が①と②に分かれます。三つめが、二身説のもう一つ、③色身です。釈尊入滅後の色身のブッダが、遺骨を収めるストゥーパです。釈尊の遺骨（ダートゥ）を収める遺骨塔（仏塔・仏舎利塔・卒塔婆）、これは釈尊のお墓ではありません。遺骨と要素・本質は同じインド語で、「ダートゥ」と申します。釈尊のストゥーパは、このダートゥをそなえる「生ける色身の釈尊そのもの」であり、最高の福田として機能します。

釈尊入滅後のブッダの現存は、この三つの在り方で確認されています。もし釈尊の入滅とともにブッダがいなくなったとしたら、三宝帰依が行えず、仏教は滅びていたはずです。きちんと仏教が続いているということは、ブッダは残っていたという何よりの証拠です。

以下、①、②、③の例を見てまいります。

①は、二例とも初期仏典ですね、まずは『サンユッタ・ニカーヤ（相応部経典）』です。ヴァッカリという弟子が、

「自分は病気になって、もう死にそうだ。もう二度と釈尊に会えないかもしれない」と。その見舞いに釈尊がやってきてくれて、ヴァッカリは喜ぶのです。ところが、釈尊は「私のような老いぼれて、いずれ朽ち果てていく肉体を見て何になるというのか」と、逆にたしなめるのです。そして、こう説きます。「法を見る者は私を見る。私を見る者は法を見るのである」。この「法を見る」というのは、「お経を読む」という意味ではなく、「菩提を覚る」という意味です。これは、①の「真理」の方の法です。

また別の機会に、次の『ディーガ・ニカーヤ（長部経典）』では、ヴァーセッタという弟子に、「如来は次のように呼ばれるのである。いわく、法（＝菩提）を身体とするもの（法身）、そして、法そのもの」、これは原語ではダンマブータといいまして、法そのものでもいいし、法になった、法と一体となった、とにかく、真理と一体化しているのです。

ですから、釈尊の姿は、本当は見えないのです。「見えないものが仮の姿をとっている」というのが、仏教の元々の考え方です。つまり、本仏と迹仏の発想は元々あるのです。「真理と一体化して見えないものが仮に見えている」という発想。ですから、釈尊の姿を最初描こうと思ったときに、菩提樹で表したり、仏足で表すしかなかったのです。とある非常に高名なインド哲学者が、「釈尊は後代になって神格化された」と。違います。釈尊は後代になって人格化されたのです。元々真理と一体化して見えない存在なのです。それが、あえて、この世に姿をとどめてくださっているのです。そのように仏教徒は、最初から理解していたのです。

法身のもう一つの例。今度は、お経としてです。②の例です。これは、『小乗涅槃経』です。「アーナンダ（阿難）よ、お前たちは、〝教えを説かれた師は亡くなられてしまった。私たちの師はもういらっしゃらないのだ〟と思うかもしれない。しかし、アーナンダよ、そのように考えてはならない。私がお前たちのために説いた法と制定した律、それが私の滅後にはお前たちの師なのである」。まさに、これは、「一一文文是真仏、お経が仏なのだ」という②の法

身です。

次も同じ文脈で、『ミリンダパンハ（ミリンダ王の問い）』です。ギリシャの王がナーガセーナという上座部の比丘と対論して、仏教の深さに感銘を受けます。「尊者ナーガセーナよ、ブッダは実在するのですか」。もちろん、これは仏滅後の話です。「はい、大王よ。〔釈迦牟尼〕世尊は実在します」、「尊者ナーガーセーナよ、そうであるならば、〝ここにある〟とか〝そこにある〟とかいって、ブッダを示すことはできるのですか」、「大王よ、すでに入滅された世尊のことを、〝ここにある〟とか〝そこにある〟とかいって示すことはできません。大王よ、しかしながら、世尊を〈法を身体とするもの（法身）〉として示すことはできます。大王よ、なぜならば、法（教え）は世尊によって説示されたものだからです」。「お経が釈尊なんだ」という、②の方の法身です。

③、今度はストゥーパです。『小乗涅槃経』の中で、こう説かれています。釈尊が遺言されます。「アーナンダよ、転輪聖王の遺体の処置と全く同様の方法で、如来〔である私〕の遺体も処置されなければならない。交通の要所には如来のストゥーパを建立せよ。誰であれ、そこで華や香料や顔料を献げて礼拝したり、心を浄めて信じるならば、そのことによって彼らには、長きに亘り、利益と安楽がもたらされるであろう。

如来・応供・正遍知はストゥーパを建立されるに相応しい。ではアーナンダよ、どのような道理にもとづいて、如来・応供・正遍知はストゥーパを建立されるのに相応しいのであろうか。アーナンダよ、〝これがかの世尊・応供・正遍知のストゥーパなのだ〟と言って、多くの者たちが心を浄めて信じる。彼らはストゥーパの前で心を浄めて信じたことで、死後、現在の身体を失った後に、善趣である天界へと生まれ変わるのである。アーナンダよ、まさにこの道理にもとづいて、如来・応供・正遍知はストゥーパを建立されるに相応しいのである」。ストゥーパが最高の福田として機能してることが分かります。

次は、『増一阿含経』です。漢訳のみで、恐らく、この文章は大乗の影響を受けていると思われますが、読んでい

きます。「如来の身体は金剛のようである。〔私の滅後には〕この身体を砕いて芥子粒ほど〔の遺骨〕にして世間に広く行き渡らせよう。そうすれば、未来（如来滅後）の篤信者は如来の姿・形を見ることはできなくても、これ（私の遺骨）を供養することができるだろう。これを供養すれば、四姓家や四天王や三十三天や自在天や他化自在天にも生まれるという福徳も得られるだろう」。天界に行ける。先ほどと同じですね。ただ、天界を飛び越えていきます。六道を越えて四聖にもなれるというのです。「阿羅漢や独覚にもなれるだろう。もしブッダと成ることができたとしても、それもやはりこの〔遺骨供養の〕おかげなのである」。

大乗の影響が強いと思いますが、『増一阿含経』では遺骨供養で成仏までできてしまう。すごいです。

このように、釈尊は入滅しても無仏の時代ではなかったことを、ご確認いただけたと思います。

ところが、2－4．無仏の時代でないにも関わらず、仏教徒たちは成仏できない、なぜ小乗であったのか、の理由です。

それまでの②経典という法身（小乗経典。阿含経典）、先ほどの『増一阿含経』のような例外もありますが、これは、ほんとうに例外で、ほとんどの小乗経典、阿含経典には、仏弟子に対する成仏の授記が記されていません。小乗経典、阿含経典では、仏弟子のゴールは阿羅漢です。授記がないからなのです。

また、①真理という法身（仏菩提、般涅槃）、および、③遺骨塔という色身は「ものいわぬ沈黙のブッダ釈尊」です。もとから仏弟子に対する授記を与える能力を有していません。

釈尊滅後の仏教徒たちが成仏へと歩むため（小乗仏教を脱するため）には、「彼らに成仏の授記を与えられる釈尊」がどうしても必要だったのです。これが、大乗経典（大乗仏教）が誕生するに至った根源的理由です。先ほど、三原所長が基調報告の中で触れてくださったように、大乗仏教の始まりは大乗経典です。大乗経典が生まれて、それによって大乗仏教が生まれてきたのです。

2－5．初期大乗経典の誕生です。まず、大前提です。経典は小乗、大乗問わず全て仏説です。先ほど「1－2」で確認しておきました。そして経典は、法身たる釈尊、これは「2－3の②」です。最初期の大乗経典が『般若経』です。原題は『プラジュニャーパーラミター』。「六波羅蜜を修する菩薩であること」という条件付きで、成仏の授記を与えてくれる釈尊、法身仏が『般若経』です。ただ、六波羅蜜を修さない、もしくは、修せない者は除外されます。例外があるのです。これが第一の点です。

また、『無量寿経』、原題は『スカーヴァティーヴューハ』。法蔵比丘が修行して阿弥陀仏に成っていくという話が説かれてあるものです。今生では六波羅蜜を修するのは無理なので、来世は極楽（スカーヴァティー）という別世界に生まれ変わって――これが往生です――阿弥陀仏（アミターバ、アミターユス）のもとで修行をしよう、と。六波羅蜜を修するのが無理な人にとってはいいかもしれませんけど、今生での成仏は断念です。できない。また、『無量寿経』はあくまで釈尊が説いた経典ですから、『無量寿経』は法身たる釈尊なのです。そうであるにも関わらず、別のブッダにすがらねばならないという矛盾があるわけです。なぜ、釈尊にすがれないのか。これが二つめの点です。例外なく、一切衆生に成仏の授記をしてくれる釈尊の出現が待望されました。そこで満を持して登場してくるのが、『法華経』なのです。

3．『法華経』の誕生。『法華経』こそが一大事の因縁をもって、この世に出現した釈尊なのです。ついに、万人の成仏を保証する、万人に授記してくれる釈尊が出現しました。それが『法華経』です。四ページへまいります。

3－1．まず、釈尊在世中における成仏の授記。これは、小乗仏教の消滅を意味します。「序品第一」で入定していた釈尊は、「方便品第二」の冒頭で出定します。そして、声聞や、声聞の中で修行を完成した阿羅漢を含めて万人が、例外なく、どのような修行・積善を通してでも成仏可能であることを明かします。

次は「方便品」の一節です。通常なら「読んでおいてください」ということになるのですけれども、せっかくの機

会ですし、「方便品」を読むと普段は「十如是」で終わってしまうことが多いと思いますので、この部分を読んでみたいと思います。これこそ、「方便品」の主要な部分です。「小善成仏」といわれていますが、小善成仏というよりは、「どんな修行でも成仏できますよ、例外はありませんよ」ということを、微に入り細に入り説明しているとても大切な部分です。

まずは、従来通り【六波羅蜜の修行による成仏】。「そこには」、過去の諸仏の在世中のことです。「彼ら〔過去の諸仏〕の面前で教えを聴いたり、あるいは教えを聴き終えた衆生たちがいて、〔彼らは〕布施を与え、戒を実践し、忍辱によってあらゆる修行を成満しており、精進と禅定に懸命に取り組み、あるいは智慧をもってこれら諸々の教えが思惟され、種々の福徳がなされた。彼ら全員が覚りを得る者となったのである」。これは、「ブッダと成った」と言っているのです。「覚りを得ることになっている」ではなくて、「覚りを得た」ということです。

二番目、【遺法による教導による成仏】。「ある者たちは、かの諸仏が入滅した後に、〔彼らの遺法の〕教誡において忍耐を得、調御され、教導を受けた。彼らも全員が覚りを得る者となったのである」。

次、今度は、【ストゥーパ・仏像・仏画供養による成仏】です。お金持ちが立派なものを建てたり、お金がない人が泥で作ったり、でも、それは差がない。どんなものでも成仏するよ、と。

「また、ある者たちは、かの入滅した諸仏の遺骨に対して供養を行い」、この人たちはお金持ちなんですね。「宝玉でできた幾千という多くのストゥーパを起てる。〔どのような宝玉かといえば、〕ある者たちは金銀や水晶でできた、〔ある者たちは〕エメラルドでできた、〔ある者たちは〕猫目石や真珠でできた、〔ある者たちは〕すぐれた瑠璃でできた、あるいは〔ある者たちは〕サファイヤでできたストゥーパを起てる。彼らも全員が覚りを得る者となったのである」。

だんだん、お金がなくなってきます。「また、ある者たちは石でできたストゥーパを起て、ある者たちは栴檀や沈

香でできた〔ストゥーパを起て〕、ある者たちは松の木でできたストゥーパを起て、ある者たちは〔種々の〕木を組み合わせて作った〔ストゥーパを起て〕、さらにはまた、煉瓦を用いたり泥を集めたりして、諸仏のストゥーパを歓喜しながら作る者たちもあり、また、〔ストゥーパに〕準えて、曠野や険所に土砂の堆積物を作らせる者たちもある。あるいはまた、諸仏のストゥーパに準えて、戯れに」、戯れにですよ、「あちらこちらに砂山を作る子供たちもある。それらの者たちも全て、覚りを得る者となったのである。

同様に、〔ブッダに〕準えて、三十二の」、三十二相ですね。「身体的特徴をそなえた、宝玉でできた」、ここは、お金持ちです。「〔仏〕像を作らせた者もあった。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

その中には、七宝でできた〔善逝の像を作らせた者や〕、あるいはまた銅でできた〔善逝の像を作らせた者や〕、真鍮でできた善逝の像を作らせた者もあった。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

あるいは、鉛や、鉄や、泥や、粘土でできた、見目麗しい善逝の像を作らせた者もあった。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

また、自ら描いたり、あるいは描かせたりして、壁画に幾百の徳相をそなえた完全な〔ブッダの〕身体の色像を作る者もある。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

さらにまた大人であれ、子供であれ、学習中の気晴らしとして戯れに喜んで」、落書きです。「壁に〔ブッダの〕色像を爪や木片で描いた者もある。彼らは全員が慈悲深い者となり、さらに全員が幾千万もの生命あるものを救済し、多くの菩薩たちを教化したのであった。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

あるいはまた、諸々の如来の遺骨に、あるいは諸々のストゥーパに、あるいは泥で作った〔仏〕像に、あるいは〔仏画が〕描かれた壁に、あるいは土砂のストゥーパに対して、香華を供える者たちもあった。また、ある者たちはその〔遺骨やストゥーパや仏像や仏画がある〕場で、妙なる音色の太鼓や法螺貝や小鼓などの楽器を奏でさせ、ある

者たちは最上最高の覚りを得た者たちの供養のため、大太鼓を打ち鳴らした。また、ある者たちは心地よい音色の琵琶やシンバルや鼓や小鼓や笛を奏で、〔また、ある者たちは〕極めて柔らかい〔音色の〕エーコーツァヴァを」、古代の楽器のようで、よく分かりませんが、「奏でた。それらの者たち全員もまた、覚りを得る者となったのである。

また、〔遺骨やストゥーパや仏像や仏画がある場で〕諸々の善逝に対する供養のためであることを意図して、鉄鈴や水面や手のひらを打ち鳴らせたり、甘美で心地よい歌を上手に歌う者たちもある。あるいはまた、善逝たちの遺骨に対して〔供養が〕ほんのわずかであったとしても、あるいはただ一つの楽器を奏でさせただけであったとしても、そのような多種多様な遺骨供養を行って、彼ら全員もまた〔この〕世間でブッダと成ったのである」。

この世でブッダに成る。もちろん即身成仏であると同時に、一仏一世界という前提を崩しているのです。後ほど申し上げます。『法華経』は、そういう古い因習というものを打ち破っていきますので、インドでは驚きをもって迎えられたのです。

「また、壁に描かれた善逝たちの絵〈仏画〉を、ただ一つの華をもって供養したとしても、そして、たとえ〔それが〕乱れた心のままでの」、つまり形だけの「供養であったとしても、〔その者たちは〕幾千万もの諸仏に順次に見えることになるのである。また、そのストゥーパに対して合掌する者たちもあるが、〔その合掌が両手を合わせた〕完全なものであれ、手刀のように片手〔合掌〕であれ、頭を一瞬垂れただけであれ、あるいは体を一度かがめただけであれ、そのとき、遺骨を収めたそれら〔のストゥーパ〕に対して、一度だけでも〝諸仏に帰依します〟と唱えるならば、たとえそれが乱れた心のままであったとしても」、形式的、言えと言われたから無理やり言わされたのであったとしても、そして、「単に一度だけであったとしても、その者たちは全て、この最高の覚りに到達したのである」。

次、私たちも深く関係しますね。【題目受持による成仏】です。「そのとき、その時分においてはすでに入滅しているにせよ、あるいは在世中であるにせよ、彼ら〔過去・現在の〕諸々の善逝から、この教えの名前（題目）」、妙法蓮

華経です。「〔だけでも〕聞いた衆生たちもあろうが、彼らも全員が覚りを得る者となったのである」。

【諸仏の誓願があったからこそ成仏】というのが、『法華経』における成仏の根拠です。「未来世にも、幾千万もの思議することもできないほど多くの無量の諸仏があろうが、彼ら最上の世間の保護者である諸仏もまた、この〔ような種々の〕方便を示すであろう。彼ら〔未来世の〕世間の導師たちには無量の善巧方便があって、それを用いてこの世間〕において、幾千万もの生命あるものたちを、無漏の仏智へと導くであろう。彼ら〔諸仏〕の教えを聴いて、ブッダと成らないような衆生は、いかなる時もただの一人としていない。なぜならば、〝私は〔自らが〕覚りへ向けて修行した後に、〔他の者をも覚りへ向けて〕修行させよう〟というこのことが、諸々の如来の〔共通の〕誓願だからである」。

そして、「如我昔所願、今者已満足」という部分につながっていくわけです。

釈尊を含めた一切諸仏の〝私は〔自らが〕覚りへ向けて修行した後に、〔他の者をも覚りへ向けて〕修行させよう〟という共通の誓願が成就したので、一切衆生は例外なく成仏できるのです。

ときに、「『法華経』には、なぜ成仏できるか理論が記されていない。唐突に、〝みんな成仏できるぞ〟、〝一乗だ〟などと言って、理論がない」と言われることもありますが、それは大きな誤解です。ここが、『法華経』における一切皆成の揺るぎなき根拠です。

続けます。次は、「方便品」の最後の部分です。すでに阿羅漢果を得ている舎利弗に向かって説いているわけです。「それゆえ、諸々のブッダ・世間の師・救世者たちの、〔一切衆生を成仏させるという〕意図を含んだ言説（随宜方便事）を了知し、疑惑を捨て、疑念を払いなさい。〔阿羅漢果を得た〕そなたたち〔であっても、実〕はブッダに成れるのだぞ。歓喜せよ」。

「方便品」の最後は、「歓喜せよ」。まさに喜ぶわけです。なぜなら、阿羅漢果を得た人間は、阿羅漢というあり方

でこの三界を出てしまったので、「もう成仏はできないのだ」と言われていたからです。「その者が実は成仏できるのだ」という諸仏の秘密が明かされて、非常に歓喜して、そして「譬喩品」につながっていくのです。この歓喜というものが、間違いなく、今回のテーマの一つになっていくのだろうと感じています。

以降、『法華経』では、「譬喩品第三」から「授学無学人記品第九」に至るまで、釈尊は舎利弗や目連や摩訶迦葉、彼らは阿羅漢ですね。すでに三界を抜けてしまった無学の阿羅漢たちをはじめ、まだ阿羅漢になっていない有学の声聞たちに次々と成仏の授記を与えていくのです。このことによって、声聞たちが成仏していない阿羅漢の状態にとどまることは、その根拠・正当性を失うことになりました。つまり、一乗の教えというのは、小乗仏教を消滅へと導くことができるのです。

そして、小乗仏教を消滅させ、次が、一大事の因縁の部分です。「シャーリプトラよ」、舎利弗です。「私もまだ、ただ一つの乗物のみに関して衆生たちに教えを説くのである。すなわち、一切智たることを最終目的地とするブッダへの乗物（仏乗）である。言い換えれば、如来の知見に勧め導く〔教え〕だけを衆生たちに、如来の知見を示す〔教え〕だけを、如来の知見に入らせる〔教え〕だけを、如来の知見を覚らせる〔教え〕だけを、如来の知見の道に入らせる教えだけを衆生たちに説いているのである。シャーリプトラよ、私のこの教えを聴く衆生たちもまた、全員が無上正等覚を獲得する者たちとなるであろう」。

このように、釈尊在世中であれば、釈尊の肉声、教え、そして授記を直接聞くことで誰もが例外なく無上菩提を得られます。これが、「序品第一」から「授学無学人記品第九」までです。

問題は、「釈尊滅後はどうすればよいのか?」。これこそが、実は『法華経』のメインテーマです。なぜならば、『法華経』が作られた、成立したともいわれる紀元一世紀以降、二世紀、三世紀には、一切衆生は釈尊入滅後の世界に生きていたからです。今の私たちと同じです。

3－2．如来滅後はどうすればよいのか？「法師品第十」以降は、焦点が釈尊の入滅後（如来滅後）へと移動します。まず「法師品第十」で、この『法華経』の一偈だけでも受持する者に対して、例外のない授記が与えられています。

「また、薬王よ、如来の滅後にこの〔妙法蓮華の〕法門を聴く者たちがあって、それがただ一つの偈を聞いて、そして喜ぶ心を発すのが」、喜ばなければいけないのです。聞いて、喜ぶ。歓喜する必要があるのです。でも、それは一瞬でもいい。「喜ぶ心を発すのがただ一瞬であったとしても、薬王よ、〔如来である〕私はそれらの善男子・善女人たちは誰であれ、無上正等覚を得るであろうと授記する」。

同じく「法師品」です。「薬王よ、誰であれ、この〔妙法蓮華の〕法門からただの一偈を受持したり、随喜したり」、喜び、これが必ずついてくるのですね。『法華経』に出会って、喜びというものがなければいけない、これが大前提です。「受持したり、随喜したりする善男子・善女人たちがあったとして、薬王よ、〔如来である〕私はかの者たち全員が無上正等覚を得るであろうと授記する」。

『法華経』は釈尊です。仏語であり、かつ、釈尊なのです。「仏語（法身仏）である『法華経』という一切皆成の授記」なのです。そして、如来の滅後にこれを語って聞かせ、「一切衆生に成仏の授記をする」という如来の仕事を代行せよと、お釈迦さまは私たちに命じられて、それを『妙法華』では「行如来事」、原文では「タターガタクリティヤカラ」、「如来の仕事を為す者」であり、それを、「法師、ダルマバーナカ」と『法華経』は呼んでいます。これは、如来の、人々に一切皆成の授記を与えるという仕事の代行をする人です。この法師こそが『法華経』の行者です。「法華経の行者」ということばは、『法華経』には出てきません。日蓮聖人のおことばですけれども、この法師こそが間違いなく、日蓮聖人がおっしゃる「法華経の行者」なわけなのです。如来の〈ハタラキ〉をこの世にあらしめている、代行者です。タターガタクリティヤカラ、行如来事、です。

では、七ページです。これ以降、「従地涌出品第十五」に至るまで――ただし「提婆達多品第十二」は除きます――如来の滅後に、誰が、どのように、この『法華経』を受持し、説示し、衆生を利益するのかが問われています。

例えば、次の一節は「見宝塔品第十一」です。「さて、そのとき如来である釈迦牟尼世尊は、かの」、虚空会にみんなが昇った後です。「〔虚空会に昇った〕四衆たちに告げた。〝比丘たちよ、そなたたちの中で、この娑婆世界において、この妙法蓮華の法門を説き明かす任に堪えうる者は誰かあるか。如来〔である私〕が〔まだ〕在世中の、今が〔誓いを述べる〕その時であり、今がその機会なのである。比丘たちよ、如来〔である私〕はこの妙法蓮華の法門を〔その者に〕付嘱して、入滅せんと欲しているのである〟」。

ところが、釈尊は、――次は「従地涌出品」の冒頭です――他方世界より来至した菩薩衆に向かって、「止めよ、善男子らよ。そなたたちがこの〔如来の〕仕事〔の代行〕を行ったからといって何になろうか。〔いや不可能なので何にもならない〕」。「お前たちには無理だ」と説かれているわけです。

では、結局、誰が如来の滅後に、この娑婆世界において、『法華経』を説き明かす菩薩大士＝如来の〈ハタラキ〉の代行者＝永遠に現存する釈尊の実現者なのか。よろしいですか、衆生に成仏の授記をするのは仏さましかできないのです。その、『法華経』という授記をする仏さま、『法華経』が仏さまなのです。それを説き明かすことによって、一切衆生に授記をしていくという仏の仕事の代行をしていく限り、お釈迦さまは授記をする存在として、そのお釈迦さまの〈ハタラキ〉が永遠にこの娑婆世界に残ってくるのです。それが、永遠に現存する釈尊の実現者＝法師であり、『法華経』の行者なのです。

すぐさま、お釈迦さまは、こうおっしゃるのです。「善男子らよ。まさしく私のこの娑婆世界」、この娑婆世界は、お釈迦さまの世界です。「私のこの娑婆世界には、六万のガンジス河の砂の数に等しい菩薩たちがあり、――中略――また付き人がおり」という、たくさんの弟子、「その者たちが、私が入滅した後の時代、後の時節にこの〔妙法

蓮華の」法門を受持し、読誦し、説き明かすであろう」。そして、大地が割れ、地より菩薩が湧現するという、あのダイナミックな場面に移行していくわけです。

続く「如来寿量品第十六」と「分別功徳品第十七」では、如来の滅後であっても、『法華経』が説示される限りブッダ如来である釈尊は永遠にこの世に現存し、衆生利益の〈ハタラキ〉をなし続けると開示されます。

「久遠実成本師釈迦牟尼仏の永遠の現存は」、現存とは、この世にとどまってるということです。「法師（法華経の行者）の『法華経』説示を通して、一切衆生皆成の授記を与えるという如来の事業を代行し続けること、つまり、如来の〈ハタラキ〉をこの世に顕し続けることによって、はじめて実現される」。如来の仕事、機能、ファンクションを私たちが代行していく、そのことによって、釈尊は永遠にこの世に存在し続けて人々を救ってくださるのです。

これを聞いて奇異に思われた方もいらっしゃるかもしれません。でも、思い起こしてみてください。実際、「如来寿量品第十六」において久遠の釈尊は開顕されますが、それは、大もとを辿れば、久遠の昔から弟子であった地涌の菩薩と関連づけられて、はじめて開顕されたではありませんか。たくさんの弟子たちがいて、「え？　こんなたくさんの弟子を、どうやって教えたんですか？　無理でしょう」と問われて、「いや、実は、とっくの昔からブッダだったんじゃ」と。私たちがずっと人々を救っていく限りにおいて、その仕事が過去から現在、そして未来に続く限りにおいて、お釈迦さまは常にこの世にいらっしゃるのです。

仏と私たちとの関係は一方通行ではありません。どこかに、神や創造主のように仏さまがいて、命令が降りて来るのではありません。それだと一方通行で、キリスト教的です。仏教の場合、仏と私たちの関係は常にインタラクティブです。相互作用。なぜなら、例えば、私たちの存在に応じて仏さまは教えや在り方を変えてくださっているからです。

「一つの教えに従え」というタイプではなくて、私たちのありようが仏さまのありようを規定してくる。それが縁

起なのです。仏とわれわれの関係も縁起なのです。つまり、われわれの活動がなければ仏は滅びるのです。だから、仏法僧、三つの宝がなければ仏教は滅びてしまうのです。人間という存在、仏弟子という存在が、仏や法と並んで大事だ。このような宗教は他にありません。「教祖があって、教えがあって、それに従う人たちがいる。それが三つとも大事なんだ。どれ一つも欠けてはだめだ」などという宗教は、仏教以外に聞いたことがありません。インタラクティブな存在なのです。私たちの行動がなければ、釈尊は滅びます。もしくは、絵に描いた餅です。単なる文字や絵や像になってしまいます。

文字を現実化させ、人々を救う私たちの行動を通して、初めて釈尊はこの世に現れて人々を救うのです。

ハンドアウトに戻ります。七ページの下の方です。以下、「法師功徳品第十九」に至るまでは、『法華経』受持の様々な功徳を説くことで、『法華経』が受持され説示されることを勧め、如来の滅後に衆生を利益する如来の〈ハタラキ〉が実現しやすくなるように配慮されています。いいといっぱいあるから、『法華経』を説示しようよ、と。

そして、続く「常不軽菩薩品第二十」では、如来の滅後には、一切皆成の授記を行うブッダのことば『法華経』を説き聞かせることによってのみ、如来の仕事の代行、すなわち、一切衆生に成仏を授記するという〈現実のハタラキ〉、ファンクションが実現されることを、さっきからずっと説いてきたわけですが、常不軽菩薩という釈尊過去世の姿を示すことによって、改めて強調するのです。

「さらに、得大勢よ、かの世尊〔である、入滅していた最初の威音王如来・応供・正遍知〕の教えのもとで、かの常不軽菩薩大士〔であった私〕は幾百人の比丘、幾百人の比丘尼、幾百人の優婆塞、幾百人の優婆夷たち誰に対しても、この〔妙法蓮華の〕法門を〔語って〕聞かせ、〝私はあなた方を軽んじません。皆様方は全員、菩薩行を行じてください。あなた方は如来・応供・正遍知と成るでありましょう〟と〔授記したのである〕」。この『法華経』を語って聞かせ、授記するのです。「このようしていたからこそ、私は速やかに成仏できたのだ」と、お釈迦さまはおっし

ゃっているわけです。

「得大勢よ、このように、大利益のあるこの法門の受持・読誦・説示が、諸々の菩薩大士たちにとって、無上菩提〔獲得〕への導き手となるのである」。まさに、この『法華経』そのものがブッダ釈尊として菩薩たちを導いてくれるわけです。「それゆえ、得大勢よ、如来の滅後には諸々の菩薩大士たちは、〔仏語にして釈迦牟尼仏たる〕この法門を常に受持し、読誦し、説示し、説き明かさなくてはならない」という教誡です。お釈迦さまははっきりと教誡されているのです。

そして、地涌の菩薩に『法華経』を付嘱し、釈尊滅後の受持・解説を教誡する「如来神力品第二十一」へと自然に連なっていきます。次の部分は、別付嘱部分です。「そのとき世尊は、上行〔菩薩〕をはじめとする、かの〔地涌の〕菩薩大士たちに告げた。〝善男子たちよ、如来〔である私〕が入滅した後、そなたたちがこの〔妙法蓮華の〕法門を恭敬して受持し、教示し、書写し、読誦し、解説し、修習し、供養せよ〟」。教誡です。つまり、私たちこそが、地涌の菩薩であり、『法華経』の行者であり、法師でなくてはならない、ということです。

4．結論です。如来から成仏の授記を与えられない者は、いかに修行しようとも成仏することはできません。『法華経』を編み出した無名の菩薩たちは、釈尊入滅後の、もちろん、仏はありますね、でも、それは成仏を与えてくれない仏でした。「成仏の授記を与えてくれる如来がいないのだ」という強い意識のもと、如来の意義を、説法によって、この世に現れ出で、現在化され、衆生に授記を与えて利益する〈現実のハタラキ〉と捉えたわけです。

どこかに霊的な存在があるのではありません。私たちの行動を通して現実化してくるのです。そして、この〈ハタラキ〉を代行する『法華経』の行者（法師、地涌の菩薩）が存在する限り、釈尊も永遠にこの世にとどまって衆生利益をしてくださるわけです。このように、「提婆品」を除き、「序品第一」から「如来神力品第二十一」に至るまで、『法華経』の編纂意図は一貫していることがお分かりいただけると思います。

『法華経』の成立に関しては、従来、大きく分けて、段階成立説と、「一貫してできたんだ」という二つの説があったように思われます。布施浩岳先生をはじめとする伝統的な見方は、段階成立、大体三つぐらいに分けるのです。一方、同時成立説を説かれるのは、勝呂先生ですね。私は中間ぐらいに位置していまして、「序品」から「神力品」までは、「提婆品」を除き、これは一貫していると思います。その中に差異はないと考えています。ただ、その後、「薬王品」以降、「嘱累品」も最後ですから、「薬王品」以降はちょっと違うかな、という気がします。例えば、「薬王品」は『法華経』の文脈を分かってない人が作ったということがありありと分かる部分が残っていて、違うということが確かめられています。

ただ、「序品第一」から「如来神力品第二十一」までは、一つのテーマです。釈尊の入滅後に私たちの行動を通して人々を救う。それによって、釈尊は永遠にこの世に存在していく。つまり、強烈な使命感を私たちに与えている。その選ばれた者としての恍惚と不安、共にわれにあり、これが『法華経』の法師の自覚を持ったわれわれの喜び（歓喜）であり、そして使命であり、場合によっては、それによって、試練を受け、勿論迫害を受けることもありましょう。『法華経』の行者が試練を受ける、迫害を受けることは、もう説かれてあるわけです、『法華経』に。そして、日蓮聖人はそれを証得され、実証されたわけです。

5．です。―結論の後に―『法華経』のどこが凄いのか？

インド、そしてチベットで、『法華経』は全然流行っていません。言及されるとすれば、「何か阿羅漢も成仏できると説いている、変わった経典があるよ」という感じです。チベットでも、そうです。『法華経』という経典は、従来の仏教理論というものの中で、不都合なもの、人々の成仏の可能性を奪っていくようなものを、壊しにかかっている経典です。例えば、「方便品」で説かれた、「阿羅漢でも成仏可能」、この「成仏」という発想が、この輪廻を脱していく、三界を抜け出て解脱する、解脱というものと成仏を同一に考える、いわゆるインド伝統的な文脈で言うと、こ

れは全く理にかなわないのです。

なぜならば、阿羅漢果を得ることで、すでに三界を抜け出ているからです。もう、解脱している者が、どうやって、もう一度抜け出るのか。実は、『法華経』の中では、「解脱は複数回可能だ」と説かれています。これは、インド一般から見ると、あり得ません。実は、元々仏教で「解脱」ということばは、「輪廻を脱する」という意味ではなかったのです。元は、仏教における「解脱」というのは、「煩悩を離れること」なのです。でも、インドでは、「解脱」と言った場合に、そのままイコール、「輪廻からの解脱」と読まれてしまうのです。インドというところではそうなのです。

でも、「煩悩を脱していく」のであれば、まず阿羅漢という境地には立ったけれども、まだ断ち切れていないものがある。だから、次へ、次へと進んでいく、という、いわゆる、化城喩品の型が可能となります。ところがあれは、インドの文脈では、全くあり得ません。したがって、『法華経』は、もっと原初的な、仏教の根源的な解脱の意味に戻っているのです。輪廻からの離脱ではない、「煩悩からの離脱」という意味で使い直しているのです。だからこそ、「阿羅漢果を得た者が解脱できる」という発想がはじめて可能になるのです。

われわれ東アジアにある人間は、インド人が信じるようなかたちでは、輪廻を信じていません。でも、だからこそ、そのような私たちにも『法華経』は通じるのです。なぜなら『法華経』における「解脱」は、インドにおける一般の解脱よりも、もっと根源的で万人に通じる、「煩悩を離れる」、そういう意味で使っているからです。

また、『法華経』は、「一仏一世界」という大前提をも破壊していきます。仏教では、すでに小乗経典の段階から、「一つの世界には一人のブッダしか存在できない。この娑婆世界には、お釈迦さまがいらっしゃるから、お釈迦さまの世界だから、われわれは成仏できないんだ」。つまり、自分たちが成仏できないのを、お釈迦さまのせいにしているような傾向があるのです。

それに対抗して、「じゃあ、この世界を離れれば、別世界ならいいでしょう」ということを言い出すのが、例えば『無量寿経』なのです。そうすると、小乗側は、「いやいや、この世界というのは三千大千世界のことだ。三千大千世界の中で仏は一人だけだから、いかに極楽に行ったって無理ですよ」と。なぜ、そこまで成仏したくないのか分からないのですね。やはり、彼らは小乗だと思います。

このような「一仏一世界」という、成仏の障害となる理屈、その理屈をも、『法華経』は壊していきます。先ほど見たように「方便品」の中で、「この世間で、みんな成仏しました」と説かれています。もっと明解なのは、「見宝塔品」です。「見宝塔品」で釈尊と多宝如来が二仏並坐します。これ、仏教世界では、もう、びっくり仰天の出来事なのです。一世界に二仏が同時に現れて、同じ価値を持って並坐している。並坐というのは、「同じ位を持っている」という意味です。そうでなければ「対坐」するわけです。上座と下座で対坐する。二仏並坐、これ、ものすごいです。そして、その後、「見宝塔品」では、「全ての仏は分身仏だ」ということでイコールにして、そして、さらに「神力品」では、全ての仏土を一つにしてしまいます。

このように『法華経』は、「一仏一世界」という前提をも破壊していきます。恐らく、そのような「前提を破壊していく」という関係からでしょう。今の位置に「提婆品」が挿入されたのだと思います。「提婆品」は、もちろん、女人成仏、そして畜生成仏という点でも大事だと思いますけれども、実は、インド仏教史上で大事なのは、頓悟を説いていることです。あっという間に成仏できるというのが頓悟で、その対概念は漸悟ですね。歴劫修行しなければいけません。

インドでは、あくまでも漸悟が主流というか、ほとんど漸悟です。頓悟なんて幻想に過ぎない。「あっという間に？　それは気絶しているに過ぎないだろう」というような批判もあるぐらいです。もちろん、頓悟というのは、インドにもないわけではないのですが、極めてマイナーです。その頓悟というものを、あそこで成仏理論として謳って

いるのです。

「誰もが成仏できる。そして、この世界で、今生で成仏できる」。つまり、「仏がいっぱいいて構わない。そして、この身のままで成仏できる」。『法華経』がなければ、決して一念三千は生まれてこないですし、南無妙法蓮華経には至ってこないわけです。

先ほど申し上げましたように、釈尊の永遠性というものは、あくまで私たち仏弟子と関連づけられて開顕されているのです。私たちを離れて、どこかに、雲の上の方に、「天にましますわれらの父よ」ではないのですね、仏教における仏さまというのは。私たちと関連し合って、常に存在してくださる。つまり、私たちがきちんと歩む限り、常に存在してくださる仏さまなのです。

そして、その仏さまは、「経典の付嘱」ということに莫大な力を注いでいます。繰り返し繰り返し、「頼むぞ、頼むぞ、頼むぞ」。つまり、「お前たちが地涌の菩薩になってくれ」と。「地涌の菩薩が現れ出る、時代を越えてどんどん現われてくる、それを絶やさないでくれ」。時を越え、場所を越え、われわれは、今、この場に、この平成の日本に、地涌の菩薩として生まれてきているわけです。「この流れを絶やさず、地涌の菩薩として如来の〈ハタラキ〉を示し、人々を救ってくれ。それこそが私、釈迦牟尼仏なのだ。その〈ハタラキ〉こそが私。お前を通して、私は、この世に現れ出てくるのだ」と。

それは、「私たちが釈尊の永遠の現存を実現させるのだ、人々を救っていくのだ、そしてそれによって私たちも救われていくのだ」という強烈な使命感と同時に、歓喜、恍惚、試練も含めて、与えてくれるわけです。

『法華経』はほんとうに、凄いというか、素晴らしいというか、その『法華経』というものに、ほんとうに、きちんと向かい合えているのだろうか、向き合えているのだろうかと、相手の大きさに改めて、ちょっとおののいてしまうような感じもいたしますけれども、この『法華経』に縁を持った私たちは、否応なしに、それを受持し説き示さな

ければなりません。そして、『法華経』で理想を実現し、この世に釈尊をあらしめる、その〈ハタラキ〉、ファンクションを常に実現して、そこにこそ、そして、それしか、一天四海皆帰妙法、末法万年広宣流布の実現はないものと、私は信じております。

今後とも、ぜひ、共に学ばせていただき、そして歩ませていただければと存じます。ご清聴ありがとうございました。南無妙法蓮華経。

司会　鈴木先生、ありがとうございました。それでは、しばらく質疑応答の時間を取らせていただきたいと思います。ただ今の基調講演に際しまして、ご質問がありましたら挙手にてお願いいたします。

質問1　貴重な講演、ありがとうございました。

先生、日蓮門下には日蓮本仏論という教義がございますけれども、今日の先生のお話で、「地涌の菩薩の働き、つまり仏様の働き、私である」ということが、そのまま、やはり日蓮本仏論にいくのか。また、興門派さんのおっしゃる脱仏というものを、この『法華経』の中から導き出せるのか。もし出せるとしたら、私たち日蓮宗は、大きな意味で、日蓮門下で教学の再編成をするべきなのか、その辺、先生の見解をお聞かせいただければありがたいと存じます。

鈴木　ご質問ありがとうございます。

まず、結論を申し上げますと、日蓮本仏論は断じて成立しません。あくまで仏さまが存在して、私たちがある。しかし、「それは、キリスト教におけるような一方通行ではない」ということを申し上げたのです。仏さまのありようは、私たちに応じて変わってくださるわけです。ですから、私たちが怠けていれば、仏さまも怠けてしまうことにな

ってしまう。私たちが如来の仕事の肩代わりをしなければ、如来は、この世に現れ出てこない。でも、それは、私たちが主であって、それによって久遠の仏さまが従となるようなものではなくて、ある意味では、一番根本にあるのは妙法蓮華という、宇宙を流れる理法、真理なのです。

根本の理法があって、それが、あるときには迹仏として現れ、そして、あるときには私として現われてくるという、それがマンダラの世界観であり、宇宙観（コスモロジー）なのです。日蓮本仏論のような、日蓮聖人が主であって、久遠の根本仏であるという、そのような構図はまったくあり得ません。

ただ、申し上げておきますと、どこかに仏さまがいて、そこから教えが降ってくるっていうのだと考えてしまうと、『法華経』は死んでしまいます。

質問1　ありがとうございました。

司会　他にどなたか、ご質問のある方。はい。

質問2　二つあるのですけれども。今、いろいろ日蓮本仏論で議論したときに、最終的なことばなんですけど、「お釈迦様の生まれ変わりが日蓮さんだから、日蓮さんの日蓮本仏論は成立するんだ」なんていう、おかしな理論ができて、「それじゃあ、おかしいじゃないか」というので。だけど、それに対する反論がうまくできなくて、非常に、今、悩んでるんです。先生がおっしゃる法華経なんでございますけれども、勝呂先生は、確かに、「一から二十八まで全て、最初にできたんだ」とおっしゃっておられて、布施浩岳先生たちは、その反対のことをおっしゃってて、先生おっしゃるように、大体、二十一で「嘱累品」が最後ですね。

あとの三から八は、要するに、ご祈祷の類になりまして、そのように理解してるんですけども、そうすると、いつ頃なんでしょうか？　外国でも、百年ぐらいたってから、「後からできた」とかって、そんな百年も、お経の本が、どこかで眠ってるはずないんですよね。だから、その意味においても、比較的短い間に二十八まで完成したんじゃないかと思うわけですけど、先生は、どういうふうにお考えでしょうか。

鈴木　はい、ご質問ありがとうございます。最初のお答えは、先ほどの答えと一致してるのではないかと思われますが。そもそも、お釈迦さまが生まれ変わってくることはあり得ません。私の今日の話が日蓮本仏論と近いように取られてしまうというのは、とても意外に思っております。常に仏教において、仏という存在と私たちというのは、相互に縁起の世界の中で存在しているという大前提がありまして、そのような話の中では、本仏論は絶対に出てこないと思います。縁起のことがそもそも分かってない方が、何か救世主的な見方を持って、そのようなことを言い出してしまうのではないでしょうか。

質問2　それは、天台本仏論、「天台大師が本仏だ」という言い方をしたらしいんですよね。それで、それを正宗が真似をして、日蓮さんに置き換えて、日蓮本仏論だと言い出した。だから、真似て作ったのが興門教学だという議論がある。

鈴木　そういうことは、仏教の中では、あり得ないと思われます。

それと二番目について、よろしいでしょうか。竺法護訳の『正法華経』が三世紀にできておりまして、竺法護訳の段階で、今の二十七品、「見宝塔品」と「提婆品」が一緒になって、二十七品全部揃っていますので、『法華経』の最

初、いつできたか分からないのです。全く分からないのですけれども、もし、一世紀……、一世紀は早すぎるような気がしますけど、分からない、二世紀だとすると、やっぱり、五十年から百年の間だろうと思います。

お経は、大乗経典は全てが最初から書写されてできています。例えば、教えがオーラルな伝承、口承の伝承ということになると、説く人がいなくなれば、お経も、なくなってしまうのですね。

ところが、リテラルな、書写の伝統が入ってくると、その人を離れても、お経が残っていれば、独り歩きすることができるのです。「恐らく、アーカイブ、書庫みたいな共有のものが、どうもあったのではないか」と。「そこに納められていて、サンガに属する人たちは、自由にそれを閲覧できたのではないか。そこに新たなものを付け加えたりしていったのではないか」とも言われています。そして、それが可能であったのは、今日、最初に見た、「何であれ善く説かれたものであれば、それは全てブッダ釈尊のことばである」という大前提があったから加えられた。祈禱用、そうですね、現世利益を説くものは、例えば「法師功徳品」にも説かれていますし、必ずしも終わりの部分だけではないと思います。

質問2　属累品は結語、結びということですか。

鈴木　一番最後です。で、『法華経』のほんとうの付嘱は別付嘱で終わっているのではないかと私は思っていまして、総付嘱したら地涌の菩薩の意味がなくなってくると思うのです。「お前たち、地涌の菩薩の自覚を持て、持てよ、持てよ、持てよ」というのが、ずっと、「従地涌出品」からの流れなわけで、急に、何で、みんなに「いいよ」って言うのか。なぜなら、前の部分で、「お前は、やらなくていいよ、無理だから」と言っていたのに、急に「お前もやれ」となるので、「嘱累品」は、やっぱり、ちょっと違います。だから、最後に後から付いたと考えるべきで、ほんとう

は、『法華経』は「神力品」で終わっていると思います。

質問2　はい、分かりました。ありがとうございました。

司会　他に、どなたかいらっしゃいましたら。はい。

質問3　すみません、失礼いたします。「海の話が出てくるお経、経典は、後から付け加えられた」というようなことを聞いたことがあるのですが、「提婆品」とかですね。「観音経」も、そうですね。お自我偈の中に海が出てくるんですが。

鈴木　ああ、「没在於苦海」ですか？

質問3　はい。

鈴木　あれは、原文にはないですね。「海」という字は、ないです。

質問3　そうですか。

鈴木　そもそも、あれは、日本の古写経の流れで「没在於苦海」であって、高麗蔵経では「没在於苦悩」、苦悩、と

しかなっていないです。ただ、苦海ということばは、例えば「苦海に沈む」みたいなかたちで、割と文化的にも、吉原などでも使われてたことばですが。

質問3　はい、分かりました。ありがとうございました。

鈴木　すみません、最初の、海の部分がどうかというのは、ちょっと分かりませんが、『法華経』がどこでできたかも分からないのですけども、当時の仏教の一大聖地というのは、紀元前後だと西北インドの辺りです。そこでできたとすれば、確かに海からは遠いかもしれないですね。そうすると、海のことというのは後から付いたのかもしれませんが、ここではお答えできないです。ともあれ、自我偈に海は、ないです。

司会　よろしいでしょうか？

質問3　ありがとうございました。

司会　他にどなたか。

質問4　はい。非常に系統だったお話をしていただいてありがたいと拝聴させていただきました。われわれは、日蓮聖人を、本化上行菩薩の再誕だ、という捉え方をさせていただいております。そういうことで、われわれは、地涌の菩薩の一員ということになるんですが、どのお寺でも、その上行菩薩のことは理解できても、あと、上行、無辺行、

浄行、安立行という四菩薩の位置付け、そして、その四菩薩というのは何を意味してるのかということが、今の妙法蓮華経では漠然として把握できないでおりますが、四つの菩薩を出したということには、私は、大きな意味があるだろうと。

その中で、上行菩薩が一番の上首であったということは、いわゆるインドのサッダルマプンダリーカなんかでは、どういう具合な立場で説明されているのか分かりませんので、先生のお考えをお聞きしたいと思います。

鈴木　まず、その四つが出てきてるのは意味があるというのは、後でご教授いただきたいと思うのですけれど、原文で読む限り、なぜ四人なのか分からないです。従来言われてるのは、「四つの、というのは、菩薩行としてあり得べきものだから挙げたのではないか」ぐらいのことで、それ以上のヒントは、とりあえず見つからないです。お上人は、どのようにお考えになっているのでしょうか？

質問4　これは私の個人的な考えでございますが、インドには五大、地水火風空、そのうち空は、当然形がありませんが、地水火風、その五大、あるいは四大と言われるもの、そういうものが、インドでは古来、根本の元素として考えられてる。そうすると、あれが、化の空の中から出てくるということが、「従地涌出品」の中に書かれてますと、いわゆる、この世の構成を成す四つの元素というようなことが、その中に含まれてくるのではないかという、私なりの個人的な。というのは、別の先師の本の中で、妙法蓮華経の中に、地徳、火徳、水徳、風徳というものが、このことばの中にも含まれているんだ、というような説明がありまして、その中で、上行菩薩は、火徳、火の徳を持った菩薩である、というようなことを書かれた書籍を読んだことがあるものですから。この四大菩薩というのは、その四つの元素を、いわゆる菩薩化したものではなかろうかということを、私個人としては捉えておるものですから、この世

を構成してるものが、この世で活躍するというようなことを、本仏は願われて、この世の形をしたものでなければ、この世のものを教化することはできない、地涌の菩薩だ、というようなことが、四大菩薩というようなことが出てくるんじゃないかというようなことが、もし、インドの、そういう、サッダルマプンダリーカの中、あるいはインドの哲学の中にあるならばということで、お尋ねしました。以上です。

鈴木　とても興味深くて、「この世界を構成するものが、この世界を救っていくんだ」というのは、とても宗教的に深いと思います。ただ、無辺行の無辺は虚空に相当しそうな気もいたします。そうすると、うまく四つに配当できないかな、というような気もしてしまいます。でも、とても宗教的には深いお話だと思います。ありがとうございました。

司会　他に。もし、何かおありでしたら。

質問5　大変興味深く聞かせていただきました。今日のお話の中で、「衆生と仏のインタラクティブな関係というのを捉えている」というところは、大変興味深く聞かせていただいたんですけども、それの一番の根拠として、鈴木先生が考えてらっしゃることを、もう少し分かりやすく説明していただければと思いました。

鈴木　分かりました。先ほど申し述べたつもりでいたのですが、言葉足らずだったのかもしれません。最初から、今日の筋書きでお示ししたように、キリスト教との対比で示しました。キリスト教では、最初に、宇宙の根源に、宇宙をつくった創造主がいるわけです。その創造主が世界をつくり、この地球をつくり、全ての生き物をつくっていった。

その創造主からの命令を受けて、命令通りに行動していく、というのがキリスト教的な発想の宗教です。

ところが、仏教の場合には、仏さまは、私たちのありように応じて教えを説き分けてくださったわけです。だから、あれほどまでにたくさんのお経ができてきたわけです。つまり、一つの根源から、全てに、演繹的に、「これに従えばいいんだ」ではなく、対機説法をしてくださっている。私たちのありように応じて、お釈迦さまもありようを変えてくださる。それが、後に一念三千になるわけです。地獄に堕ちた者には、地獄に堕ちた者に通じる仏さまでなければ、ことばが通じません。そういうことを、私は、私たち（地踊の菩薩、法華経の行者）が釈尊のハタラキを代行することを通して永遠の釈尊をこの世に現在化し続けることも含め、インタラクティブであると思っているのですが、いかがでしょう？

質問5　基本的に対機説法という言い方がありますので、衆生の機根に応じて説き分けていくというのは、その通りだろうと思いますね。ですので、そのように見ていくこともできるし。それは、ただ、それでいいんじゃないかなと思いながら聞かせていただきましたので、はい。そんなところで、ありがとうございます。

鈴木　はい。ありがとうございました。

司会　今後の予定もありますので、これで質疑応答を締めさせていただきます。鈴木先生、どうもありがとうございました。

法華経を現代に読む
—インド学・仏教学の視点から—

鈴木隆泰

1．キリスト教における聖書と仏教における経典との違い

1－1．キリスト教における聖書と神（主）との関係

初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。

（『新共同訳　新約聖書』「ヨハネによる福音書」1.1）

神（主）が語ったことばのみが神のことば（聖書）

1－2．仏教における経典とブッダ釈尊との関係

摩訶波闍波提よ、もしそなたが何らかの教えを知ったとして、その法が貪欲ではなく離欲へと導き、繋縛ではなく束縛からの離脱へと導き、〔悪業の〕増殖ではなく損減へと導き、大欲ではなく少欲へと導き、不満足ではなく知足へと導き、群聚との交わりではなく閑寂へと導き、懈怠ではなく精進努力へと導き、維持しがたい状態ではなく維持しやすい状態へと導くのであれば、摩訶波闍波提よ、それは〔誰が説こうとも〕間違いなく法（経典）であり、律であり、師匠〔である私〕の教えであると知らねばならない。（*Vinayapiṭaka* ii. 259.3-11）

何であれ善く説かれたものであれば、それは〔誰が説こうとも〕ブッダ釈尊のことばである。

（*Aṅguttara-Nikāya* iv. 164.7-9）

- ブッダ釈尊が語ったことばはブッダ釈尊のことば（経典）
- 衆生を覚り・涅槃へと導くことばもブッダ釈尊のことば（経典）

仏教においては、衆生を無上菩提へと引導する教えであれば、**誰が説こうとも**、それらは全て**釈尊の直説（仏説、仏語）**

- 『法華経』を含め、大乗経典も全てが仏説。
- 「大乗仏教非仏説論」は、仏教におけるブッダ釈尊のことばの何たるか、に対する無知や誤解から生じたものに過ぎない。

2．釈尊滅後の仏教

2－1．二つの成仏理論

- 業報作仏：修行の果報のみに基づいて成仏が保証される。
- 授記作仏：修行の果報に加え、先達のブッダによって成仏が予言・保証される。

→「授記作仏」が成仏理論の主流となる。その嚆矢は『ジャータカ』の「燃燈仏授記説話」

2－2．小乗仏教の誕生

「授記作仏」の思想は、成仏し涅槃に到達した釈尊と他の仏弟子たちとの差違を強調するとともに、

弟子としてブッダの声は聞いたものの、授記を得ていないため成仏できない仏弟子（声聞）たちが成仏していない阿羅漢（供養や尊敬を受けるに相応しい聖者）の状態にとどまることを正当化。

このような、成仏を目指さない・目指せない仏教を、小乗仏教（成仏に至らない、成仏に至れない劣った仏教）と呼ぶ。

２－３．釈尊入滅後は無仏の時代か

否。釈尊は入滅してもその現存は、

- 法（法身 dharmakāya）：①真理（仏菩提、般涅槃、諸法実相）と②教え（経典）。
- ③遺骨塔（色身 rūpakāya）：釈尊の遺骨 dhātu を収める遺骨塔（仏塔。仏舎利塔。卒塔婆）は、釈尊のお墓ではなく、釈尊の要素・本質 dhātu をそなえた「生ける色身の釈尊そのもの」であり、最高の福田として機能。

として確認されている。もし釈尊の入滅とともにブッダがいなくなったとしたら、三宝帰依が行えず、仏教は滅びたことであろう。

①の例：

ヴァッカリよ、法を見る（＝菩提を覚る）者は私（＝釈尊）を見る。私を見る者は法を見るのである。（*Saṃyutta-Nikāya* iii. 120.28-29）

ヴァーセッタよ、如来は次のように呼ばれるのである。いわく、法（＝菩提）を身体とするもの（法身）、―中略―　法そのものであると。（*Dīgha-Nikāya* iii. 84.23-25）

②の例：

アーナンダ（阿難）よ、お前たちは「教えを説かれた師は亡くなられてしまった。私たちの師はもういらっしゃらないのだ」と思うかも知れない。しかし、アーナンダよ、そのように考えてはならない。私がお前たちのために説いた法と制定した律、それが私の滅後にはお前たちの師なのである。（*Dīgha-Nikāya* ii. 154.5-9）

〔ミリンダ王〕「尊者ナーガセーナよ、ブッダは実在するのですか」

〔ナーガセーナ〕「はい、大王よ。〔釈迦牟尼〕世尊は実在します」

〔ミリンダ王〕「尊者ナーガセーナよ、そうであるならば、“ここにある”とか“そこにある”とかいって、ブッダを示すことはできるのですか」―中略―

〔ナーガセーナ〕「大王よ、―中略―　すでに入滅された世尊のことを、“ここにある”とか“そこにある”とかいって示すことはできません。―中略―　大王よ、しかしながら、世尊を〈法を身体とするもの（法身）〉として示すことはできます。大王よ、なぜならば、法（教え）は世尊によって説示されたものだからです」（*Milindapañha* 73.9-22）

③の例：

アーナンダよ、転輪聖王の遺体の処置と全く同様の方法で、如来〔である私〕の遺体も処置されなければならない。交通の要所には如来のストゥーパ（遺骨塔。仏舎利塔）を建立せよ。誰であれ、そこで華や香料や顔料を献げて礼拝したり、心を浄めて信じるならば、そのことによって彼らには、長きに亘り、利益と安楽がもたらされるであろう。―中略―

如来・応供・正遍知はストゥーパを建立されるに相応しい。―中略―　ではアーナンダよ、ど

のような道理にもとづいて、如来・応供・正遍知はストゥーパを建立されるに相応しいのであろうか。アーナンダよ、「これがかの世尊・応供・正遍知のストゥーパなのだ」と言って、多くの者たちが心を浄めて信じる。彼らはストゥーパの前で心を浄めて信じたことで、死後、現在の身体を失った後に、善趣である天界へと生まれ変わるのである。アーナンダよ、まさにこの道理にもとづいて、如来・応供・正遍知はストゥーパを建立されるに相応しいのである。

（*Dīgha- Nikāya* ii. 142.8-24）

如来の身体は金剛のようである。〔私の滅後には〕この身体を砕いて芥子粒ほど〔の遺骨〕にして世間に広く行き渡らせよう。そうすれば、未来（如来滅後）の篤信者は如来の姿・形を見ることはできなくても、これ（私の遺骨）を供養することができるだろう。これを供養すれば、四姓家や四天王や三十三天や―中略―　自在天や他化自在天に生まれるという福徳も得られるだろうし、また、―中略―　阿羅漢や独覚にもなれるだろう。もしブッダと成ることができたとしても、それもやはりこの〔遺骨供養の〕おかげなのである。（『増一阿含経』751a11-19）

２－４．無仏の時代でないにも関わらず、成仏できない（小乗であった）理由

しかし、

- それまでの②経典という法身（小乗経典。阿含経典）には、仏弟子たちに対する成仏の授記が記されていない。
- ①真理という法身（仏菩提、般涅槃）・③遺骨塔という色身は「ものいわぬ沈黙のブッダ釈尊」であり、もとより仏弟子たちに授記を与える能力を有していない。

釈尊滅後の仏教徒が成仏へと歩むため（小乗仏教を脱するため）には、「彼らに成仏の授記を与えてくれる釈尊」がどうしても必要

→　大乗経典（大乗仏教）が誕生するに至った根元的理由

２－５．初期大乗経典の誕生

大前提：経典は小乗、大乗を問わず全て仏説（１－２）であり、法身たる釈尊（２－３の②）

- 『般若経（*Prajñāpāramitā*）』：「六波羅蜜を修する菩薩たること」という条件付きで、成仏の授記を与えてくれる法身仏　→　六波羅蜜を修さない・修せない者は除外される。
- 『無量寿経（*Sukhāvatīvyūha*）』：今生では六波羅蜜を修するのは無理なので、来世は極楽 Sukhāvatī 世界に生まれ変わって（往生して）、阿弥陀仏 Amitābha, Amitāyus のもとで修行をしよう。　→　今生での成仏は断念。また、『無量寿経』が釈尊の説いた経典である以上、『無量寿経』は法身たる釈尊であるにも関わらず、別のブッダ（阿弥陀仏）にすがらなくてはならないという矛盾。

例外なく、一切衆生に成仏の授記をしてくれる釈尊の出現が待望された

３．『法華経』の誕生

ついに、万人の成仏を保証する（万人に授記する）釈尊が出現（一大事の因縁）

それが『法華経』

３－１．釈尊在世中における成仏の授記：小乗仏教の消滅

「序品第一」で入定していた釈尊は、「方便品第二」の冒頭で出定し、声聞・阿羅漢も含め万人が、どのような修行・積善を通してでも成仏可能であることを明かす。

【六波羅蜜の修行による成仏】そこには（＝過去の諸仏の在世中）彼ら〔過去の諸仏〕の面前で教えを聴いたり、あるいは聴き終えた衆生たちがいて、〔彼らは〕布施を与え、戒を実践し、忍辱によってあらゆる修行を成満しており、精進と禅定に懸命に取り組み、あるいは智慧をもってこれら諸々の教えが思惟され、種々の福徳がなされた。彼ら全員が覚りを得る者となった（＝ブッダと成った）のである。

【遺法による教導による成仏】ある者たちは、かの諸仏が入滅した後に、〔彼らの遺法の〕教誡において忍耐を得、調御され、教導を受けた。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

【ストゥーパ・仏像・仏画供養による成仏】また、ある者たちは、かの入滅した諸仏の遺骨に対して供養を行い、宝玉でできた幾千という多くのストゥーパを起てる。〔どのような宝玉かといえば、〕ある者たちは金銀や水晶でできた、〔ある者たちは〕エメラルドでできた、〔ある者たちは〕猫目石や真珠でできた、〔ある者たちは〕すぐれた瑠璃でできた、あるいは〔ある者たちは〕サファイヤでできたストゥーパを起てる。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

また、ある者たちは石でできたストゥーパを起て、ある者たちは栴檀や沈香でできた〔ストゥーパを起て〕、ある者たちは松の木でできたストゥーパを起て、ある者たちは〔種々の〕木を組み合わせて作った〔ストゥーパを起て〕、さらにはまた、煉瓦を用いたり泥を集めたりして、諸仏のストゥーパを歓喜しながら作る者たちもあり、また、〔ストゥーパに〕準えて、曠野や険所に土砂の堆積物を作らせる者たちもある。あるいはまた、諸仏のストゥーパに準えて、戯れにあちらこちらに砂山を作る子供たちもある。それらの者たち全てもまた、覚りを得る者となったのである。

同様に、〔ブッダに〕準えて、三十二の身体的特徴をそなえた、宝玉でできた〔仏〕像を作らせた者もあった。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

その中には、七宝でできた〔善逝の像を作らせた者や〕、あるいはまた銅でできた〔善逝の像を作らせた者や〕、真鍮でできた善逝の像を作らせた者もあった。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

あるいは、鉛や、鉄や、泥や、粘土でできた、見目麗しい善逝の像を作らせた者もあった。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

また、自ら描いたり、あるいは描かせたりして、壁画に幾百の徳相をそなえた完全な〔ブッダの〕身体の色像を作る者もある。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

さらにまた大人であれ、子供であれ、学習中の気晴らしとして戯れに喜んで、壁に〔ブッダの〕色像を爪や木片で描いた者もある。彼らは全員が慈悲深い者となり、さらに全員が幾千万もの生命あるものを救済し、多くの菩薩たちを教化したのであった。彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

あるいはまた、諸々の如来の遺骨に、あるいは諸々のストゥーパに、あるいは泥で作った〔仏〕像に、あるいは〔仏画が〕描かれた壁に、あるいは土砂のストゥーパに対して、香華を供

える者たちもあった。また、ある者たちはその〔遺骨やストゥーパや仏像や仏画がある〕場で、妙なる音色の太鼓や法螺貝や小鼓などの楽器を奏でさせ、ある者たちは最上最高の覚りを得た者たちの供養のため、大太鼓を打ち鳴らした。また、ある者たちは心地よい音色の琵琶やシンバルや鼓や小鼓や笛を奏で、〔また、ある者たちは〕極めて柔らかい〔音色の〕エーコーツァヴァを〔奏でた〕。それらの者たち全員もまた、覚りを得る者となったのである。

また、〔遺骨やストゥーパや仏像や仏画がある場で〕諸々の善逝に対する供養のためであることを意図して、鉄鈴や水面や手のひらを打ち鳴らせたり、甘美で心地よい歌を上手に歌う者たちもある。あるいはまた、善逝たちの遺骨に対して〔供養が〕ほんのわずかであったとしても、あるいはただ一つの楽器を奏でさせただけであったとしても、そのような多種多様な遺骨供養を行って、彼ら全てもまた〔この〕世間でブッダと成ったのである。

また、壁に描かれた善逝たちの絵（仏画）を、ただ一つの華をもって供養したとしても、そしてたとえ〔それが〕乱れた心のままでの供養であったとしても、〔その者たちは〕幾千万もの諸仏に順次に見えることになるのである。また、そのストゥーパに対して合掌する者たちもあるが、〔その合掌が両手を合わせた〕完全なものであれ、手刀のように片手〔合掌〕であれ、頭を一瞬垂れただけであれ、あるいは身体を一度かがめただけであれ、そのとき、遺骨を納めたそれら〔のストゥーパ〕に対して、一度だけでも“諸仏に帰依します”と唱えるならば、たとえそれが乱れた心のままであったとしても、単に一度だけであったとしても、その者たちは全て、この最高の覚りに到達したのである。

【題目受持による成仏】そのとき、その時分においてはすでに入滅しているにせよ、あるいは在世中であるにせよ、彼ら〔過去・現在の〕諸々の善逝から、この教えの名前（題目）〔だけでも〕を聞いた衆生たちもあろうが、彼らも全員が覚りを得る者となったのである。

（*Saddharmapuṇḍarīka* 49.11-52.12）

【諸仏の誓願があったからこそ成仏】未来世にも、幾千万もの思議することもできないほど多くの無量の諸仏があろうが、彼ら最上の世間の保護者である諸仏もまた、この〔ような種々の〕方便を示すであろう。彼ら〔未来世の〕世間の導師たちには無量の善巧方便があって、それを用いてこ〔の世間〕において、幾千万もの生命あるものたちを、無漏の仏智へと導くであろう。彼ら〔諸仏〕の教えを聴いて、ブッダと成らないような衆生は、いかなる時もただの一人としていない。なぜならば、“私は〔自らが〕覚りへ向けて修行した後に、〔他の者をも覚りへ向けて〕修行させよう”というこのことが、諸々の如来の〔共通の〕誓願だからである。

（*Saddharmapuṇḍarīka* 52.13-53.4）

釈尊を含めた一切諸仏の“私は〔自らが〕覚りへ向けて修行した後に、〔他の者をも覚りへ向けて〕修行させよう”という共通の誓願が成就したので（*Saddharmapuṇḍarīka* 47.11-12）、一切衆生は例外なく成仏できる。→　これが『法華経』における一切皆成の根拠。

【阿羅漢でも成仏】それゆえ、諸々のブッダ・世間の師・救世者たちの、〔一切衆生を成仏させるという〕意図を含んだ言説（隨宜方便事）を了知し、疑惑を捨て、疑念を払いなさい。〔阿羅

漢果を得た〕そなたたち〔であっても、実〕はブッダに成れるのだぞ。歓喜せよ。

（*Saddharmapuṇḍarīka* 59.5-6）

以降、「譬喩品第三」から「授学無学人記品第九」に至るまで、釈尊は舎利弗や目連や摩訶迦葉などの阿羅漢たちをはじめ、声聞たちに次々と成仏の授記を与えていく。→このことによって、声聞たちが成仏していない阿羅漢の状態にとどまることは、その根拠・正当性を失うことになった。

→　小乗仏教の消滅を意味する

そして、小乗仏教を消滅させ、

シャーリプトラ（舎利弗）よ、私もまた、ただ一つの乗物のみに関して衆生たちに教えを説くのである。すなわち、一切智たることを最終目的地とするブッダへの乗物（仏乗）である。言い換えれば、如来の知見に勧め導く〔教え〕だけを衆生たちに、如来の知見を示す〔教え〕だけを、如来の知見に入らせる〔教え〕だけを、如来の知見を覚らせる〔教え〕だけを、如来の知見の道に入らせる教えだけを衆生たちに説いているのである。シャーリプトラよ、私のこの教えを聴く衆生たちもまた、全員が無上正等覚を獲得する者たちとなるであろう。

（*Saddharmapuṇḍarīka* 42.15-43.2）

釈尊在世中であれば、釈尊の肉声を聞くことで誰もが例外なく無上菩提を得られる。

釈尊滅後はどうすればよいのか？　これが『法華経』のメインテーマ

なぜなら『法華経』成立時には、一切衆生は釈尊入滅後の世界に生きているから

３－２．如来滅後はどうすればよいのか？

「法師品第十」以降は、焦点が釈尊の入滅後（如来滅後）へと移動

まず「法師品第十」では、この『法華経』の一偈だけでも受持する者に対して、例外のない授記が与えられている。

また、薬王よ、如来の滅後にこの〔妙法蓮華の〕法門を聴く者たちがあって、それがただ一つの偈を聞いて、そして喜ぶ心を発（おこ）すのがただ一瞬であったとしても、薬王よ、〔如来である〕私はそれらの善男子・善女人たちは誰であれ、無上正等覚を得るであろうと授記する。

（*Saddharmapuṇḍarīka* 224.8-10）

薬王よ、誰であれ、この〔妙法蓮華の〕法門からただの一偈を受持したり、随喜したりする善男子・善女人たちがあったとして、薬王よ、〔如来である〕私はかの者たち全員が無上正等覚を得るであろうと授記する。（*Saddharmapuṇḍarīka* 225.8-10）

如来の滅後に、「仏語（法身仏）である『法華経』という一切皆成の授記」を語って聞かせ、「一切衆生に成仏の授記をする」という如来の仕事を代行する者（tathāgatakṛtyakara, *Saddharmapuṇḍarīka* 227.1; 行如來事, 『妙法蓮華経』30c28）＝法師 dhamabhāṇaka。如来の〈ハタラキ〉の実現者

法師こそが〈法華経の行者〉

以降「従地涌出品第十五」に至るまで（「提婆達多品第十二」を除く）、如来の滅後に、誰がどのようにこの『法華経』を受持し説示し、衆生を利益するのかが問われる。

> さて、そのとき如来である釈迦牟尼世尊は、かの〔虚空会に昇った〕四衆たちに告げた。「比丘たちよ、そなたたちの中で、この娑婆世界において、この妙法蓮華の法門を説き明かす任に堪えうる者は誰かあるか。如来〔である私〕が〔まだ〕在世中の、今が〔誓いを述べる〕その時であり、今がその機会なのである。比丘たちよ、如来〔である私〕はこの妙法蓮華の法門を〔その者に〕付嘱して、入滅せんと欲しているのである」（*Saddharmapuṇḍarīka* 250.9-13）

ところが、釈尊は他方世界より来至した菩薩衆に向かって、

> 止めよ、善男子らよ。そなたたちがこの〔如来の〕仕事〔の代行〕を行ったからといって何になろうか。〔いや不可能なので何にもならない。〕（*Saddharmapuṇḍarīka* 297.6-7）

では結局、誰が、

　如来の滅後に『法華経』を説き明かす菩薩大士
＝　如来の〈ハタラキ〉の代行者
＝　永遠に現存する釈尊の実現者
＝　法師、法華経の行者　なのか？

> 善男子らよ。まさしく私のこの娑婆世界には、六万のガンジス河の砂の数に等しい菩薩たちがいる。―中略―　その者たちが、私が入滅した後の時代、後の時節にこの〔妙法蓮華の〕法門を受持し、読誦し、説き明かすであろう。（*Saddharmapuṇḍarīka* 297.6-7）

そして地より菩薩が涌現する。続く「如来寿量品第十六」と「分別功徳品第十七」では、如来の滅後であっても、『法華経』が説示される限りブッダ如来である釈尊は永遠にこの世に現存し、衆生利益の〈ハタラキ〉をなし続けると開示される。

> 久遠実成本師釈迦牟尼仏の永遠の現存は、法師（法華経の行者）の『法華経』説示を通して、一切衆生皆成の授記を与えるという如来の事業（用、作）を代行し続ける（如来の〈ハタラキ〉をこの世に顕し続ける）ことによって、はじめて実現される

実際、「如来寿量品第十六」における久遠の釈尊は、久遠の昔から弟子であった地涌の菩薩と関連づけられて、はじめて開顕された。

以下、「法師功徳品第十九」に至るまでは、『法華経』受持の様々な功徳を説くことで、『法華経』が受持され説示されることを勧め、如来の滅後に衆生を利益する釈尊の〈ハタラキ〉が実現しやすくなるよう配慮されている。

続く「常不軽菩薩品第二十」では、如来の滅後には、一切皆成の授記を行うブッダのことば『法華

経』を説き聞かせることによってのみ、如来の仕事の代行、すなわち、一切衆生に成仏を授記するという〈現実のハタラキ〉が実現されることを改めて強調する。

さらに、得大勢よ、かの世尊〔である、入滅していた最初の威音王如来・応供・正遍知〕の教え（教誡、遺法、像法）のもとで、かの常不軽菩薩大士〔であった私〕は幾百人の比丘、幾百人の比丘尼、幾百人の優婆塞、幾百人の優婆夷たち誰に対しても、この〔妙法蓮華の〕法門を〔語って〕聞かせ、“私はあなた方を軽んじません。皆様方は全員、菩薩行を行じて下さい。あなた方は如来・応供・正遍知と成るでありましょう”と〔授記した〕のである〕。

（*Saddharmapuṇḍarīka* 382.3-6）

得大勢よ、このように、大利益のあるこの法門の受持・読誦・説示が、諸々の菩薩大士たちにとって、無上菩提〔獲得〕への導き手となるのである。それゆえ、得大勢よ、如来の滅後には諸々の菩薩大士たちは、〔仏語にして釈迦牟尼仏たる〕この法門を常に受持し、読誦し、説示し、説き明かさなくてはならない。（*Saddharmapuṇḍarīka* 383.3-6）

そして、地涌の菩薩に『法華経』を付嘱し、釈尊滅後の受持・解説を教誡する「如来神力品第二十一」へと自然に連なっていく。

そのとき世尊は、上行〔菩薩〕をはじめとする、かの〔地涌の〕菩薩大士たちに告げた。「―中略―　善男子たちよ、如来〔である私〕が入滅した後、そなたたちがこの〔妙法蓮華の〕法門を恭敬して受持し、教示し、書写し、読誦し、解説し、修習し、供養せよ」

（*Saddharmapuṇḍarīka* 390.11-391.6）

４．結論

如来から成仏の授記を与えられない者は、いかに修行しようとも成仏することができない。『法華経』を編み出した無名の菩薩たちは、釈尊入滅後の〈無仏の時代＝成仏の授記を与えてくれる如来がいない時代〉という強い意識のもと、如来の意義を、“説法によって現在化され衆生に授記を与えて利益する〈現実のハタラキ〉”と捉えた。そしてその〈ハタラキ〉を代行する『法華経』の行者（法師、地涌の菩薩）が存在する限り、釈尊も永遠にこの世に現存する。「提婆品」を除き、「序品第一」から「如来神力品第二十一」に至るまで、『法華経』の編纂意図は一貫している。

５．『法華経』のどこが凄いのか？　―結論の後に―

- 阿羅漢でも成仏可能　＝　解脱が複数回可能
- 「一仏一世界」という前提を破壊。
- 頓悟を主張。
- 釈尊の永遠性が、仏弟子と関連づけられて開顕。
- 「経典の付嘱」に莫大な力を注いでいる。
- 「私たちが釈尊の永遠の現存を実現させるのだ」という強烈な使命感を喚起。